

互恵性を重視した遠隔日本語教育実習の実習生および学習者の学び —教養としての日本語教育を学ぶ日本の大学生から 台湾の学習者へのインタビュー活動—

守屋久美子（東京外国語大学博士後期課程）

1. はじめに

2020年に新型コロナウイルスが世界的に広がり、多くの高等教育機関はオンラインでの授業実施を余儀なくされました。日本語学習者の日本語学習に関わろうと考える者に対する日本語教育実習もその影響を受け、海外への渡航制限や来日する留学生の減少などにより、多くの教育機関が対面実習の対比として位置づけられるオンラインでの遠隔日本語教育実習⁽¹⁾を実施しているようです（稲葉2022など）。現状では遠隔日本語教育実習はあくまでも緊急時の手段と捉えられていますが、今後の活発な議論によって遠隔日本語教育実習がさらに広がる可能性が大いにあるでしょう。

一方で、遠隔日本語教育実習には実施上の課題が存在しています。それは、岸・大谷（2014）の指摘する「実習生と学習者の期待の齟齬」です。実習生は日本語教育実習を通して日本語教育の技術や知識を身につけたいのに対し、学習者側はオンラインでの会話の機会として捉えるため、主に学習者の側が思っていた活動と異なるとしてインターネットの活動に参加しなくなるといえるものです。岸・大谷（2014）は、その原因を対面実習とは異なり教師と学習者が共有する教室のような空間が存在しなかったために学習者が自分の役割を位置づけるリソースを見いだせなかったこと、さらに使用したSkypeというICTを学習者が「インフォーマルなコミュニケーションツールである」と理解したことによるとしました。

筆者は、「期待の齟齬」を解消するために、遠隔日本語教育実習の実施に「互恵性」という考え方を導入してはどうかと考えています。

「互恵性」とは異なる母語を持つ学習者がお互いの母語を学びあうタンデム学習という学習方法の中で重視されている原則の一つで、Kötter

（2003）は「全てのパートナーが目標言語の母語話者との共同作業（collaborating）から等しく恩恵（benefit）を受け」（p. 147）ることと定義しています。

また、筆者は教育実習は必ずしも専門的な日本語教師の養成だけを目指して行われるべきではないと考えています。そのため、「日本語教育実習」という用語を「（学習者の日本語学習に関連する）日本語学習関連人材に対して行われる、実際の日本語学習者に対する教育行為を含む活動」（守屋，2023，p. 285）として捉えています。今回の実践では、「教養としての日本語教育」を学ぶ大学生を対象とした授業で、「互恵性」を重視しつつ学習者にインタビューを行うという活動を「実習」として試みました。本稿ではこの実践について報告します。なお、本稿では「教養としての日本語教育学」を、日本語教育学を専攻としない一般の大学生を対象とした「実践である『日本語教育』に関わる知識や背景等についての学び」（志賀，2021，p.4）と定義し、実践について報告します。

2. 活動の概要

2-1 参加者と目的

今回の活動は、2022年10月から2023年1月にかけて東京外国語大学の教養科目としてオンラインで行われた授業の中で実施されました。授業は90分×13回行われました⁽²⁾。授業の履修者（以下、実習生）は1年生から4年生までさまざま、全部で45名が履修し、インタビュー活動には41名が参加しました⁽³⁾。授業全体の目標は「日本語教育に関する基礎的な知識や技術を身につける」と「インターネット上で日本語を教えるための基礎知識を身につける」であり、本活動は授業の後半部分で行われました。一方、台湾の学習者は台中科技大学で日本語を学ぶ学

生であり、活動協力者の簡靖倫先生を通して以下のようなチラシを配布して呼びかけてもらいました。その結果、60名の学習者が参加希望を提出したため、実習生1名に対して学習者1、2名というグループを作成してインタビューを行うこととしました。



図 1 学習者に配布したチラシ

インタビュー活動では日本側の実習生が台湾の学習者に対して日本語学習のことや日本や台湾、日常生活のことについて日本語で質問することとしました。この活動を通して、実習生が日本語教育の基礎的な知識や技術を実践し、日本語学習者に関する事例を通じた理解を促すことを目的としました。一方、台湾の学習者は日本語を用いて話す機会を持つことができるため、互恵的な活動になると考えました。

2-2 活動とインタビューのスケジュール

筆者の経験から、オンラインで行うインタビュー活動では実習生と学習者間でマッチングを行い、相互に連絡が取れる状態にすることがとても困難です。そのため、11月後半から12月上旬にかけて実習生と学習者にインタビューが実施可能な日時を提出してもらい、その日程が合う者をペアとして配置しました。学習者側には募集時に連絡先（メールまたはLINE）も提出し

てもらい、実習生に学習者の連絡先を伝えて各自連絡をするようにしました。インタビュー活動は12月後半から1月上旬にかけて行われました。数名の実習生および学習者は日程決定後に予定が合わなくなってしまったようでしたが、その際は自分のペアとなった人に直接連絡して調整するように指示しました。

全体の詳細なスケジュールは以下の通りです。

表 1 本実践のスケジュール

日付	授業内容
1 10/5	オリエンテーション
2 10/12	日本語学習者とはどんな人たちか
3 10/19	日本語学習者の目線から日本語を見てみよう
4 10/26	日本語教師とはどんな人たちか
5 11/2	日本語教育の技術を使ってみよう
6 11/9	オンラインのコミュニケーションの特徴を理解しよう
7 11/16	オンラインのツールを使ってみよう
8 11/30	インターネットでインタビューしよう①準備をしよう
9 12/7	インターネットでインタビューしよう②質問の日本語を考えよう
10 12/14	インターネットでインタビューしよう③練習をしてみよう
11 12/21	インタビューを振り返ってみよう①経験を共有しよう
12 1/18	インタビューを振り返ってみよう②録画を見て振り返ろう
13 1/25	最終レポートを書こう

3. 活動のようす

3-1 インタビューにおける目標設定

以下では、実習生がインタビュー活動のために授業内で行った準備について説明します。実習生は、日本語教育に関する基礎的な講義を受けたあと、インタビューで達成したい目標を決定しました。授業の中では、自分の考えたことを他の実習生に話すことで得られるものがあるのではないかと考え、ブレイクアウトルームを用いて3~4名程度のグループを作成し、その中で自分の考えを話してもらったこととしました。設定した目標とその理由について提出してもらったところ、「そこまで意識せずにやさしい日本語を使う」や「相手がなるべくリラックスして会話楽しい、日本語結構分かるかもと思ってもらえる」、「オンラインを活用した取り組み



図3 インタビューの様子

いない実習生もいたため、これからインタビューを行う者へのアドバイスも行うように促しました。その結果、うまく行った点としては「対話形式にしたので緊張せずにインタビューすることができた」、「台湾関連の質問は、相手もリラックスして答えてくれた」、「表情から相手の理解度を確認しながらすすめることができた」、「少しリアクションをオーバーにしたり、相槌や追加の質問をすると、話が盛り上がりやすかったし、向こうからもたくさん話してくれた」などが挙げられ、スムーズにインタビューを進められた様子が窺えました。一方、うまくできなかった点としては、「相手のZoomの不具合に迅速に対応できなかった」、「一つの話題の話が終わって、他の話題に変えることがスムーズにできなかった」、「中国語で教えてもらうことが多々あって、チャットに書いてもらいたかったが、説明不足で、書いてもらえなかった」など、Zoomの使い方やインタビュー進行上の問題点、日本語でのやりとりに関する問題点が挙げられました。また、これから行う人へのアドバイスとして、「インタビューというより雑談という感覚で行ったほうがいい」、「質問は多めに用意しておいたほうがいい」といったインタビュー進行上のアドバイスや、「自分の大学生活について話すと相手も興味を持ってくれる」、「聞きたいことは短い質問を何個か重ねて深掘りにしておくの方が会話っぽくスムーズにできると思う」など、インタビューの内容に関するアドバイスが挙げられました。

一方、まだインタビューを行っていない実習生からは、「やはり最初のアイスブレイクがとても重要だと思った」、「質問内容を事前になんとなく伝えるのは相手も答えやすく、自分も



図4 インタビューに関する感想(一部)

十分な回答を得られるのでいいなと思った」など、インタビューを実施する上での心構えや準備に関する部分について感想が挙げられました。

さらに、実習授業終了後には、最初に立てた目標を達成できたか否かに関して他の実習生と共有を行いました。ある実習生は「相手がわからないことがあったとしても、なるべく日本語以外の言語を使用しない」という目標を立て、実際にインタビュー活動の中で「推し」という言葉を具体的な例を交えながら説明することができたと報告しました。この報告に対し、他の実習生が「『推し』をどのように説明したのか」と質問したところ、「特別好きなキャラクターや人」と説明し、さらに相手の学習者が好きなキャラクターを例に上げて説明したという回答が挙げられました。これらのやりとりからは、オンライン授業においても実習生同士のやりとりが活発に行われたことが窺えました。



図5 目標の達成とその理由(一部)

4. 考察

4-1 実習生の学び

以上のインタビュー活動から、実習生の学びは多かったと考えられます。特に、今回のイン



タビュー活動に参加した学習者はいずれも日本語レベルが高く、そのレベルに至るまでの学習者のたゆまぬ努力に思い至った実習生も少なくありませんでした。学習者が「一方的に教えられる存在」ではなく、「一人の個人」として学んでいる存在であることを実習生が理解したことは、日本語学習者の姿を知るといふ本実践の目標達成を示していると考えます。

学習者が用いる日本語の側面については、やさしい日本語の練習という意味では学習者の日本語レベルに助けられ、どの程度達成できたか疑問であると述べた実習生が多く見られました。確かにやさしい日本語の存在を知り、その理念に基づいて日本語をコントロールする練習は、日本語母語話者のみならず元学習者として参加した実習生にも必要です。しかし、「やさしい日本語を身につける」ことは第一に日本語母語話者（ないし日本語熟達者）としての自分に意識を向けるとともに相手が理解できるような言葉遣いを用いることを意識するためです。そのため、今回のインタビュー活動では実習生たちは相手の理解度に注意を払い、自分の日本語をコントロールしようと意識できました。

また、他の実習生との議論の中で得られた学びもありました。例えば、質問内容についての議論を行った際に相手のレベルに合わせて質問を選ぶために複数の質問を用意しておくことにした実習生や、インタビューをすでに行った実習生からの話を聞いてアイスブレイクの重要性を意識した実習生が見られました。インタビューは個別に実施したものの、それぞれの経験や意見を持ち寄ることでよりよい活動を行うことができ、学びを深められたと考えられます。

4-2 学習者の学び

本実践は、主に実習生側へのアプローチが主となり、学習者側が主体的に取り組む活動を行うことはできませんでした。それでも、実習生の感想からは「学習者に『意外と楽しかった』と言ってもらった」というものがあり、学習者にとっても参加する価値のある活動だと捉えられたと考えられます。また、上述の実習生がイ

ンタビューの中で「推し」という言葉を説明したという例を挙げたように、学習者がインタビューの中で日本語に関する学びを得た可能性も示唆されました。さらに、学習者側から実習生へ質問があったという例も報告されており、学習者側も積極的にインタビュー活動に参加したと言えるかと筆者は考えます。

5. この活動で得られたこと

本実践を通して、筆者はまず教養としての日本語教育の実践として学習者に対するオンラインインタビューを実施することの意義を感じました。日本語教育に興味はあるものの実際の学習者に接する機会のない学生や、接する機会があったとしてもどのように捉えたらいいのかわからない学生に対して日本語教育の基礎的な知識を提供し、それを実践する場としてインタビューを行うことは大きな学びの機会となることが明らかとなりました。また、それをインターネット上で実施することで物理的に遠い場所にいる存在に対して思いを至らせることができることは学生が国内外の日本語学習者を個人として理解する一助となるでしょう。

実践終了後、台中科技大学の簡先生に対して本実践の報告を行いました。その際、簡先生から学習者側も積極的に参加していたというコメントをいただきました。また、今回の活動を「日本語による交流」と定義して学生に呼びかけていたことが明らかとなり、その結果として学習者側からの積極的な態度が促されていました。一方で、「日本語教育を専門としない学生によるインタビュー活動」を実習とすることは若干の不一致があるように感じられたと指摘されました。筆者は全体的な活動として課題点は残るものの、概ね成功したと考えます。

6. 今後の課題

今後の課題としては、学習者側の学びについて活動デザインの観点からより深く考えていく必要があるということが挙げられます。上述のように、学習者側にもある程度の学びがあったと考えられますが、当初想定していたような互

恵的な学び、すなわち、実習生と学習者の双方に同程度の学びがあったとは言えないでしょう。これは、互恵的な活動をデザインできなかったことが原因であると考えられます。本実践では、実習生側から学習者側への一方的なインタビューになり、学習者側から実習生側へのアプローチを活動に組み込むことができませんでした。4-2で言及したように、学習者側からの自発的な働きかけはあったものの、全てのペアでそのような会話が行われたわけではないため、活動デザインに組み込むことができればよりよい活動になると考えられます。

また一方で、筆者が取り組んでいる遠隔日本語教育実習の枠組みで本実践を捉えた場合、本活動で学習者側からの一定の関与が見られたのは、会話スタイルのインタビュー実践であったからだと考えられます。今回のような学習者側からの関与が実習生による実習授業という形式でも達成されるか否かは、上述の活動デザインの変更を行った上での実践研究が必要です。その上で学習者側に対するインタビュー調査を行い、学習者側の実態を明らかにすることで、双

方に学びのある遠隔日本語教育実習の活動デザインについて検討できると考えています。

7. 終わりに

本稿では、互恵性を重視した遠隔日本語教育実習の一環として、教養としての日本語教育を学ぶ大学生による台湾の日本語学習者への遠隔インタビュー活動について報告を行いました。

今回の実践を通して、筆者は「教養としての日本語教育」の一環として、インタビュー活動を日本語教育実習と捉えて実施することに手応えを感じました。一方で、学習者側には「インタビュー活動を行うことがどのように実習として捉えることができるのか」という点の説明が不十分であったと考えます。今回の実践を通して日本語教育実習の実習生側と学習者側の非対称性に注意を払い、学習者を「実習への協力者」ではなく「共に学び合う者」として捉えられるような実習授業の実施を考えていく必要があると感じました。今後も日本語教育に興味がある者と日本語学習者の双方に学びがあるような実践を行っていきたいと考えています。

注

- (1) 本稿では、対面で実施される日本語教育実習と対比させて「遠隔日本語教育実習」と呼んでいます。
- (2) 13回の授業のほか、2回のアクティブ・ラーニングを実施して単位認定を行っています。本授業では、インタビュー活動への関与とその録画を見返すことを2回分のアクティブ・ラーニングとして扱いました。
- (3) インタビューに参加した実習生のうち、日本語母語話者は36名、非母語話者は5名でした。
- (4) Padlet (<https://padlet.com/>) とは、インターネット上で議論を行う際に有用なツールです。マップ上にコメントを書き加えたり、キャンパス上で付箋の関係性を示したりすることができるなど、8つのフォーマットで他者との共有を行うことができます。主に教育目的で使用されることが多いツールです。

参考文献

- (1) 稲葉みどり (2022) 「オンライン日本語教育実習の試み」『愛知教育大学研究報告. 人文・社会科学編』71 1-9.
- (2) 岸磨貴子・大谷つかさ (2014) 「ICTを活用した経験学習を促す学習環境の要件:日本語教員養成の事例から」『教育メディア研究』20(2), 11-22.
- (3) 志賀玲子 (2021) 「「教養としての日本語教育学」の可能性: 大学生に対する授業実践を通して見えたこと」『一橋大学国際教育交流センター紀要』3, 3-14.
- (4) 守屋久美子 (2023) 「遠隔日本語教育実習における学習環境デザインに関する先行研究の調査」『言語・地域文化研究』29, 277-296.
- (5) Kötter, M. (2003). Negotiation of meaning and codeswitching in online tandems. *Language Learning and Technology*, 7(2), 145-172.